

# 定住化遊牧民の集落内氏族配置と墓地・井戸の分有関係

## —ヨルダン南部、フセイニーエ村の事例研究—

藤井 純夫

Intra-settlement Clan-arrangement of Sedentarized Pastoral Nomads and the Co-ownership of Cemeteries and Wells: A Case Study of al-Husayniyya in Southern Jordan

Sumio FUJII

ヨルダン南部のフセイニーエ村では、南北2件の墓地・井戸が併用されている。では、一つの集落内で複数の墓地・井戸をどのように分有しているのか。それにはどのような理由があるのか。この点について調査した結果、1) フセイニーエ村は、サウジアラビア北部からヨルダン南部にかけて分布する遊牧民、フウェイタート部族(Huweitat)の定住化集落の一つであり、同部族に属する複数の氏族が街区を単位に住み分けていること、2) その住み分けに応じて複数の墓地・井戸が分有されていること、3) 氏族間の住み分けは、集落内道路の閉鎖性にも表れていること、が判明した。

キーワード：遊牧民、定住化、集落、墓地、ヨルダン

A single village is not always accompanied with a single cemetery and well. This is the case with al-Husayniyya, a large village in southern Jordan, where two pairs of cemeteries and deep wells are concomitantly used. The question is how they are shared among villagers, and what the sharing is based on. A brief ethno-archaeological investigation, conducted during the summer field season of 2005, has shown that: 1) the village was newly founded in the course of the compelled sedentarization of Huweitat, a large pastoral tribe occupying an extensive area from southern Jordan to northern Saudi Arabia, and mainly populated with plural clans belonging to this tribe; 2) the sharing of two pairs of cemeteries and wells is based on the intra-settlement clan-arrangement; and, 3) the habitat segmentation also shows up as a semi-closed system of settlement roads. This report summarizes the investigation results and briefly discusses their archaeological implications.

Key-words: pastoral nomads, sedentarization, settlement, cemetery, Jordan

はじめに

筆者は、1997年から、ヨルダン南部のジャフル盆地(al-Jafr)で、初期遊牧民の遺跡調査を続けている(藤井2005, 2006の文献リスト参照)。調査団宿舎は、同盆地北西部のフセイニーエ村(al-Husayniyya)に置いているが、この村に南北二つの墓地があることが以前から気になっていた。片方が手狭になったので、もう一方を新たに開設したのではない。開村当初から、二つの墓地が併用されているのである。同じことは、村唯一の水源である深井戸についても観察された。では、一つの集落の中で複数の墓地・井戸をどのように使い分けているのか。それにはどのような理由があるのか。

この点を明らかにするため、2004年夏の遺跡発掘調査の合間に簡単な民族考古学的調査を行った。ただし、延べ

2年以上居住している村であるから、村の構造や住民構成など、基本的な情報はすでに得ていた。2004年夏に実施したのは、墓地や道路などの計測・写真撮影および住民からの最終的な聞き取り確認調査である。このときの聞き取りに応じてくれたのは、調査団の現場監督を長年務めてきたマシュフル・スレイマーン・マシャアーン・ディアバート君(30歳)とその父スレイマーン氏(68歳)である。聞き取りは、同氏の自宅客間で2日間(計約5時間)行った。これ以外にも、発掘現場で数度にわたり補足質問をした。本稿は、こうした一連の調査の予備報告である。

フセイニーエ村の概況

フセイニーエ村は、ヨルダン南部マアン県の北西部に位置する、南北約1.5km×東西約1km、総面積約1.5平方

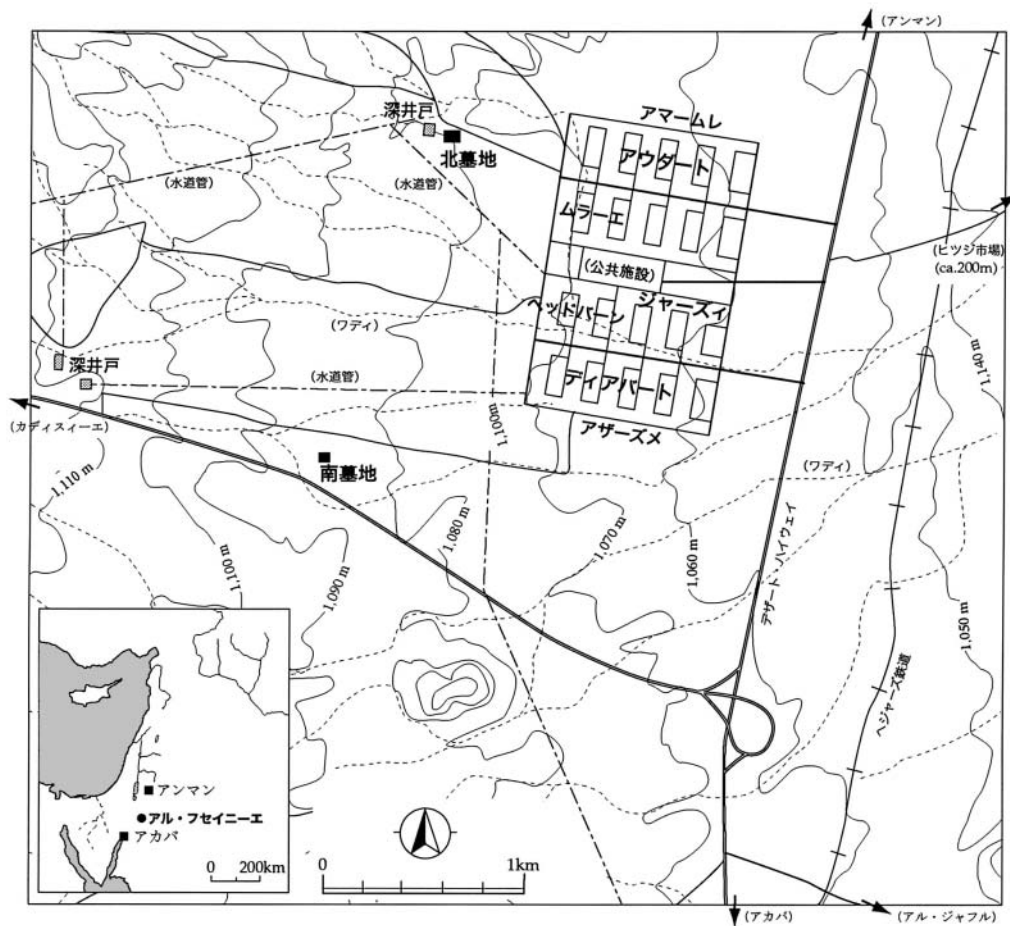


図1 フセイニーエ村とその周辺



図2 フセイニーエ村全景 (村の南西隅から北東を望む)

キロ (=150 ha) の大型集落である (図 1~2)。この村には、現在、数千人が戸籍登録されている。(従って、本来ならば「町」と称すべきであろうが、後述するように戸籍人口と在住人口との間に大きな格差があるので、ここではあえて「村」と称しておく。)

村のすぐ東には、ヨルダンの南北を貫く国道 15 号線 (通称、デザート・ハイウェイ Desert Highway) が走っており、交通の便はすこぶる良い。首都アンマン (Amman) へは、北に約 160 km。南部の港湾都市アカバ (Aqaba) へも、ほぼ同距離である。このデザート・ハイウェイは、村の南約 1.5 km の地点で、東西 2 本の地方道を分岐させている。南東に向かう道路は、約 50 km 先で、ヨルダン東部の沙漠地帯を縦走する国道 5 号線 (通称、アズラック = マアン道路) に接続している。合流地点には、空軍基地の置かれた古くからのオアシス集落、アル・ジャフル (al-Jafr) がある。一方、西に向かう道路は、約 15 km 先でヨルダン西部の丘陵地帯を縦走する国道 35 号線 (通称「王の道」Kings' Highway) に接続する。合流地点には、セメント工場のあるカディスイーエ村 (al-Qadisiyya) がある。ここから約 20 km 北上すると、谷間の小都市タフィーレ (Tafileh)、南下して同じ距離を行くと、十字軍城塞で有名な山間の小都市ショウバック (Shobak) がある。

このように、フセイニーエ村は地域交通の要衝を占めている。そのため、ヨルダン南部の集落には珍しく、2 件のガソリン・スタンドがハイウェイ添いに設置されている。その周辺には、警察署、消防署、診療所などの公共施設が建ち並び、ガレージや商店、カフェ、キヨスクなどの自営業店舗がこれに混じる。集落内にも数十軒の商店があり、この地域一帯の主要な商業圏を形成している。学校や裁判所などの存在も、フセイニーエ村の活況に貢献している。また、毎週火曜日と土曜日に村はずれでヒツジ市が開催されるので、これに関わる往来も多い。

このように活況を呈するフセイニーエ村ではあるが、その自然環境はさわめて厳しい。村の周囲は、年平均蒸散量 (約 4000 mm) が降水量 (100 mm 以下) の数十倍に達する典型的な乾燥地帯となっている (Jordan National Geographic Center 1984: Fig. 114; 1986: Fig. 56)。気候区分で言うと、ケッペンの BWK 区、ソーンズウェイトの EB3'db4'区、エンベルガーの "Very Arid - Mild" 区に、それぞれ相当している (Jordan National Geographic Center 1986: Fig. 23, 24)。当然のことながら、天然の水源は見当たらない。唯一の給水源は、村の西側にある 2 件の深井戸である。

こうした自然環境からも想像されるように、フセイニーエ村の主な生業は、ヒツジ・ヤギ、稀にラクダを交えた遊

牧である。ただし、家族全員が遊牧生活を送っているとは限らない。特に老人や就学児童を抱える家庭では、家族の大半が村に残っていることが多い。また、夏だけはテントによる遊牧、冬は村からの日帰り放牧、という折衷方式も認められる (この場合、集落は固定の冬营地として機能していることになる)。定住化を機に、本来の遊牧生活が様々な方向に分解しつつあるというのが、実状であろう。その一端が、上述したような商業・サービス業への転身である。このほか、警察、軍隊、地方役場、水道局などに務める各種の公務員や、自営のトラック・バス・タクシー業、農園の雇われ農民なども、近年増加している。とはいえ、全体の就業率は依然として低く、特に青年層の失業率が深刻な問題となっている。なお、冒頭で登録人口と居住人口の格差に言及したが、これは、公務員を含めて就業者の多くが実質的には外部への出稼ぎ労働者となっているからである。

#### 南北二つの墓地・井戸

フセイニーエ村には、南北各 1 件、計 2 件の墓地がある。このうち北側の墓地 (以下、「北墓地」とする) は、村の西北西約 0.5 km のワディ岸にあつて、南北約 110 m × 東西約 220 m、面積約 2.4 ha の規模を有している (図 3: 1)。墓地の周囲はブロック塀で囲われ、入り口は北東隅に一箇所のみ設けられている。一方、南墓地は村の西南西約 1 km の独立緩丘陵上にあり、南北約 124 m × 東西約 154 m、面積約 1.9ha の規模である (図 3: 3)。入り口は、カディスイーエ道路に近い南東隅に設けられている。両墓地の内部には数百基のイスラーム式土坑墓があり、現在も死者があるごとに埋葬が行われている。

フセイニーエ村唯一の給水源である深井戸 (深さ約 200 m) も、南北に 1 基ずつある。北側の深井戸 (以下、「北井戸」とする) は、先述した北墓地のすぐ裏手にある<sup>1)</sup> (図 3: 2)。一方、南井戸は、南墓地の西北西約 1km の地点にある小高い丘の上に設けられている (図 3: 4)。両井戸からは水道網がのびており、村内に飲料水を供給している。特に南井戸からは良質の化石水が湧出するとのことで、デザート・ハイウェイ沿いにはこれを利用したミネラル・ウォーター工場も操業している。

問題はここからである。南北二組の墓地・井戸は、村を単純に二分して利用されているのではなさそうである。では、いったいどのような分有関係が認められるのか。また、それにはどのような理由があるのか。この点を明らかにするための事前作業として、まず村の歴史と人口構成を調べてみた。



1



2



3



4

図3 南北の墓地・井戸

- 1 北墓地 (東から)      2 北井戸 (西から)  
3 南墓地 (北東から)    4 南井戸 (左の矢印) と南墓地 (西から)

### 村の歴史と人口構成

フセイニーエ村は、遊牧民定住化政策の一環として1960年代の後半に創建された、比較的新しい計画集落である(藤井2004: 57-59)。この時に用意されたのが、村の街区であり、上記の墓地・深井戸である。定住化以前は、遊牧民の黒テントが点在するだけのまったくの荒野であったと言われている。

フセイニーエ村に定住したのは、古くからこの地域一帯を根拠としてきたフウェイタート部族の一部である。村の人口の約9割が、このフウェイタート部族出身者によって占められている。氏族(部族の下位集団)別に言うと、ディアバート(Diabat)氏族が約4割、アウダート(Awdat)氏族が約3割、ジャーズィ(Jazi)氏族が約2割である。残りの約1割は、ヘッドバーン(Hedban)、ムラーエ

(Mura'e)、アマームレ(Amamre)などの少数氏族が占めている。

フウェイタート部族は、ヨルダン南部からサウジアラビア北部にかけて分布する人口数万人の大部族で、20を超える氏族によって構成されている(Muhammad 1999: 10)。従って、フセイニーエ村に定住したのは、そのうちのごく一部に過ぎない。しかも、定住化以前に全員が遊牧生活を送っていたわけでもない。事実、フセイニーエ村に定住した人々の中には、それまで別の村で暮らしていた者も多い。その場合は、「定住化」と言うよりもむしろ「移住」と称すべきであろう。例えば、ディアバート氏族の多くはフセイニーエ村の南南西約55kmにあるサダカ村(as-Sadaqa)から、アウダート氏族の大多数は南南西約30kmのウドゥルー村('Udruh)から、それぞれ移住してきたと言わ

れている。このように定住化の経緯は様々であるが、フセイーエ村がフウェイタート部族中心の村であることだけは確かである。

なお、村の人口の残り約1割は、フウェイタート部族以外のヨルダン人や国外からの移住者（例えば、パレスチナ人、エジプト人、スーダン人、シリア人、イラク人、サウジアラビア人、パキスタン人など）によって占められている。このうちパレスチナ人は、アンマン周辺の難民キャンプを経てヨルダン国内に徐々に散開・定住していった経緯を持つが、そのうちの一部がフセイーエ村の住民となっているわけである。一方、エジプト人の大半は、単身の出稼ぎ労働者である。その意味で、彼らはフセイーエ村の居住者ではあっても、定住者とは言えない。これに対して、シリア人、イラク人、スーダン人、パキスタン人には、家族を伴って定住しているものが多い。サウジアラビア人も同様であるが、その中にはフウェイタート部族またはその近縁者も多く含まれているので、必ずしも部外者とは言えない。なお、国外からの移住者にはベドウィンも含まれる。イスラエル南部のネゲブ地方から移住してきたアザーズメ氏族（Azazme）は、その代表例である。

問題は、これらの多様な構成要素、とりわけ村の人口の約9割を占めるフウェイタート部族の集落内配置である。ディアバート、アウダート、ジャーズィなどの各氏族は、村の中で単に混在しているだけなのか。それとも何らかのルールに則って、適宜住み分けているのか。この点について調べてみた。

### 集落内の氏族配置

フセイーエ村は40年ほど前に創建された村であるため、直線的かつ計画的な街区を備えている。各氏族は、この街区を単位に住み分けている（図1）。

具体的に述べてみよう。フセイーエ村の街区は、デザート・ハイウェイから西に向って分岐する2本の集落横断道によって、南北に大きく3分されている。このうち中央前方の街区を占めているのが、ジャーズィ氏族である。南北両端の街区は、ディアバート、アウダートの両氏族がそれぞれ占有している。これに対して、中央西寄りの小区画には、少数派のムラーエとヘッドバーンの両氏族が集住している。また、南北の街区外には、より少数派であるアマムレ、アザーズメの両氏族が位置している（ただし、後者はフウェイタート部族ではない）。これ以外の少数派、つまりパレスチナ人やスーダン人などは、主に自営業者として村内の大通り近辺に点在しており、特定の街区を形成するには至っていない。

こうした氏族配置の背後にあるのが、氏族間の勢力関係と定住時の経緯である。村内では必ずしも最大勢力とは言

えないジャーズィ氏族が街区の中心部を占めているのは、この氏族がフウェイタート部族の部族長（シェイク）を輩出しているからである。村への定住化を最終的に決定したのも、ジャーズィ氏族出身の当時の部族長であった。従って、まず部族長の邸宅を村の前方中心に据え、その周囲を部族長の出身氏族（ジャーズィ）で固めた上で、南北両翼に集落内の2大勢力（ディアバート氏族とアウダート氏族）を配置したことになる。一方、少数派のムラーエ、ヘッドバーンの両氏族には中央西側の小区画が割り当てられた。しかし、これよりもさらに少数派で、定住の時期が遅れたアマムレ、アザーズメの両氏族にはすでに割り当てべき街区が無く、やむなく縁辺部での居住と相成ったわけである。

集落内における公共施設や商店街の配置も、こうした住み分けと密接に関係している。まず公共施設であるが、大モスク、学校、裁判所、郵便局などは、すべて中心部西寄りの細長い区画に集中している。公共施設が村の中心に位置するのは当然の成り行きではあるが、その背後には、部族長を有するジャーズィ氏族がその隣接地に公共施設を集め、利便性を確保したという事情もあるらしい。事実、これら公共施設での雇用はジャーズィ氏族にやや傾斜しているとのことである。一方、集落内の商店は南側の横断道添いに集中しているが、これは、部族長の出身母体であるジャーズィ氏族の居住区と、村内最大勢力であるディアバート氏族の居住区との間を走る道路が、最も重視されてきたからである。

このように、フセイーエ村では、フウェイタート部族に属する複数の氏族が街区を単位に明確に住み分けている。無論、こうした区割りはいくまでも開村当時の原則に過ぎないので、それから約40年を経た現在では多少の移動が生じていることは言うまでもない。土地の売買や貸借関係、婚姻による移動などのために、例えばディアバート地区にアウダート氏族出身の男性（及びその家族）が居住していることも、まま認められる。近所つき合いの点で必ずしも快適とは言えないらしいが、これを慣習法的に咎めることはないし、特に忌避する様子も見られない。やむなくそうなった場合はそのように暮らす、というのがベドウィン社会の柔軟な点である。とはいえ、こうした事例はまだ決して多くはない。上述した氏族配置は、現在も明確に維持されているのである。

### 住み分けと墓地・井戸との関係

ここから本題に入る。まず、墓地の分有関係について言うと、北墓地はディアバート以外の氏族が共同利用している。北寄りの街区に集住するアウダート氏族がこの北墓地を利用するのは当然としても、中央部に位置するジャーズ

イ氏族や、中央やや南に位置するヘッドバーン氏族も同墓地の利用者となっている。さらに注目すべきは、集落南端に位置するアザーズメ氏族までもが同墓地を利用していることである。従って、北墓地の利用者は集落のほぼ全域にまたがっていることになる。これと対照的なのが、南墓地の利用である。同墓地は、集落南部の街区を占有するディアバート氏族が独占しており、他の氏族の利用は原則として禁じられている。そのため、村人は南北二つの墓地を、マクバラ・アウダート（アウダートの墓地）、マクバラ・ディアバート（ディアバートの墓地）と、それぞれ通称している。

したがって、フセイニーエ村で南北2件の墓地が併用されているのは、1) フウェイタート部族に属する複数の氏族が街区を単位に住み分けていること、2) そのうち上位の2氏族がそれぞれの居住区の近くに墓地を設けていること、3) 部族長出身母体のジャズィ氏族は、第二勢力のアウダートと共同で北墓地を利用していること、4) 中小の氏族もこの共同利用に加わっていること、5) 一方、集落内最大勢力のディアバート氏族は南墓地を独占的に利用していること、などの事情によるものと考えられる。

問題は、複数の墓地を造営するに至った理由であるが、これについては明確な情報は得られなかった。村の人口が多いので一つでは足りず、最大勢力のディアバート氏族だけが別の墓地を設けたにすぎない、というのが大方の回答であった。部族内の勢力争いについても執拗に尋ねたが、ディアバート氏族が他の氏族と対立していたということはないようである。むしろ、ディアバート、アウダート、ジャズィの3氏族はフウェイタート部族内でも特に関係が深く、だからこそこの村に早くから定住・同居したとの返答がもっぱらであった。

一方の深井戸についても、集落内氏族配置との対応関係が確認された。北井戸はアウダート、ジャズィほかの氏族に、南井戸はディアバート氏族に、それぞれ飲料水を供給している。ただし、二つの井戸の給水範囲は、墓地の利用区分ほど複雑には入り組んでおらず、村の南北ではほぼ二分されるだけのようである。従って、例えば村の南端に居住するアザーズメ氏族は、墓に関しては遠く離れた北墓地を利用する取り決めになっているものの、こと水道に関しては、配管の都合上、南井戸からの給水に依存しているわけである。しかし、全体としてみれば、集落内の二大勢力（アウダート・ジャズィ氏族連合とディアバート氏族）が、墓地と同様に水道についても、固有の権利を確保していることには変わりはない<sup>2)</sup>。

以上述べたことから分かるように、フセイニーエ村では、集落内の二大勢力が「生（水）」と「死（墓地）」の両面にわたって、見事に住み分けている。一個の共同体であるは

ずの集落内にこのような住み分けが内在しているのは、驚きであった。

#### 集落内道路の閉鎖性

墓地・深井戸の分有関係から判明したのは、アル・フセイニーエという一つの集落の内部に、（フウェイタート部族という上位のアイデンティティこそ共有するものの、氏族という下位アイデンティティを異にする）複数の集団が共存し、様々な面で住み分けている、という事実である。このことを別の角度から裏付けているのが、集落内道路の閉鎖性である。

先述したように、フセイニーエ村にはデザート・ハイウェイから分岐する2本の集落横断道がある。部族長の邸宅玄関まで通じる道路（村の西端まで達していないので本当の横断道とは言えないが）を含めれば、計3本である。村人は、それぞれの道路を、タリーク・ディアバート（ディアバート通り、図4: 1）、タリーク・アウダート（アウダート通り、図4: 2）、タリーク・ジャズィ（ジャズィ通り）と通称している。これらの東西横断道は幅員（約15m）も大きく、中央に緑地帯を設けた立派な造りになっている。測量も正確で、道路の直線性は十分保たれている。従って、各氏族と集落外部とを結ぶ交通手段には十分な配慮がなされていると言える。

これと対照的なのが、集落内を南北に貫く縦断道の貧弱さである。南北縦断道は2本だけであり、しかも村の東西両端に設けられているに過ぎない（図4: 3, 4）。（集落中央を走る南北道もあるが、これは途中で必ず行き止まりになっており、縦断はしていない。）加えて、道路自体の質も劣る。幅員は約6mと狭く、舗装部分は約3～4mに過ぎない。測量や施工も粗雑で、直線性すら十分に保たれていない。これらの事実は、集落外部との往来に比べて、集落内氏族間の往来にはあまり力点が置かれていないことを示唆している。

従って、例えばディアバート地区のA地点に住む人が、アウダート地区のB地点にいる友人を訪ねようとする、1) 一端、ディアバート通りに出て右折または左折し、2) 村の東西端にある縦断道まで進み、3) これを北上してアウダート通りとの交差点で右折または左折、4) 再び村内に入ってアウダート通りを進み、5) そこから更に目的地に向かって右折または左折する、という複雑な手順を踏まねばならない（図5）。ただし、これは自動車による移動の場合である。徒歩の場合は空き地を抜けて近道する手があるので、これほど複雑にはならない。しかし、ここで重要なのは、当初の街路計画が上記のような仕組みになっている、という点である。フセイニーエ村の道路はあくまでも各氏族と外部との往来に力点を置いて造られているので



1



2



3



4

図4 集落内の道路

- 1 アウダート地区横断道（東から）    2 ディアバート地区横断道（東から）  
 3 西端の縦貫道（北から）            4 東端の縦貫道（南から）

あって、集落内氏族間の往来は意外なほど等閑視されているのである。むしろ、集落内各氏族の独立性を保証し、無闇に侵害できない仕組みになっていると言った方が、より妥当かも知れない。

では、各氏族の内部だけは自由な往来が確保されているのかというと、そうではない。そこにも、氏族の下位集団（ファミリー）を単位とする住み分けがあり、それを保証する半閉鎖的な仕組みが認められる<sup>3)</sup>。ディアバート地区を例に検討してみよう。この地区にはディアバート氏族に属する複数のファミリーが住んでいるが、各ファミリーは、結婚式や葬式などに用られる大広場（南北約100m×東西約50m）を囲んで環状に配置されている（図6:1）。問題はこの広場を取り巻く周回道路であるが、これはディアバート道路から分岐する短い引き込み道路とのみ接続しており、これ以外に正規の出口を持たない（図6:2）。従って、

各家屋から外部に出ようとする、まずこの周回道路を回って引き込み道路まで進み、そこからディアバート道路に出てようやく目的の進路を取る、という面倒な行程を経ねばならない。

従って、ディアバート地区のC地点に居住するファミリーの一員が、同地区D地点に居住する別のファミリーの一員を訪れようとする、1) まずC広場の周回道路を回って引き込み道路まで進み、2) ディアバート道路に出て東に移動、3) 再び引き込み道路に入ってD広場の周回道路へと進み、4) これをぐるりと回ってようやく目的の家に到達する、ということになる（図5）。このような迂回が必要になるのも、ひとえに、氏族内各ファミリー間を貫く道路が設けられていないからである。各ファミリーは、引き込み道路とディアバート道路を介して、間接的に結ばれているに過ぎない。これでは不便であろうと思うのは、

部外者の勝手な感想である。定住化遊牧民にとって何よりも優先すべきは、往来の利便性よりも、氏族ないしはファミリー単位の住み分けとそれを保証する仕組みなのである。

考古学的意義

フセイニーエ村の事例研究から、1) フウェイタート部族という上位のアイデンティティを共有する複数の氏族がこの村に定住し、街区を単位に住み分けていること、2)

各氏族は、定住化後も氏族としての固有のアイデンティティを堅持しており、墓地や深井戸の利用に関してそれぞれの権利を(ただし一部は共同利用の形で)主張・具現していること、3) 集落内の道路にもこうした氏族アイデンティティの併存状況が投影されていること、4) のみならず氏族内の下位集団(ファミリー)間においても、同様の住み分けとそれを保証する道路配置がなされていること、が判明した。

では、これらの観察から、どのような考古学的意義を引き出すことができるであろうか。無論、フセイニーエ村は遊牧民定住化政策の一環として創設された計画集落であるから、自然発生的に形成された先史集落とはまったく事情が異なる。従って安易な援用は禁物である。しかし、計画的であるが故に、遊牧民の持つ集落観がよりダイレクトに顕在化しているとも言える。フセイニーエ村の事例研究が何らかの考古学的意義を有するとすれば、まさにこの点であろう。ここでは以下の3点を指摘しておきたい。

第一は、集落形成の動態に関してである。西アジア新石器時代の集落は、一般に、狩猟採集民のバンド組織が定住・拡大した結果と考えられているが、これでは何も言っていないのと等しい。最初に定住化したという集団は一つのバンド組織で構成されていたのか、それとも当初から複数のバンド組織が複合していたのか、あるいはバンド組織より上位のアイデンティティが定住化の単位となったのか。本来ならば、この点を明らかにすべきであろう。遊牧民の定住集落で言えば、定住化の単位が部族であったのか、単独または複数の氏族であったのか、この点が問題になる。しかし、集落の形成原理は、遺跡最下層の遺構を広汎に発掘するのが困難なこともあって、実際には何一つ分かって

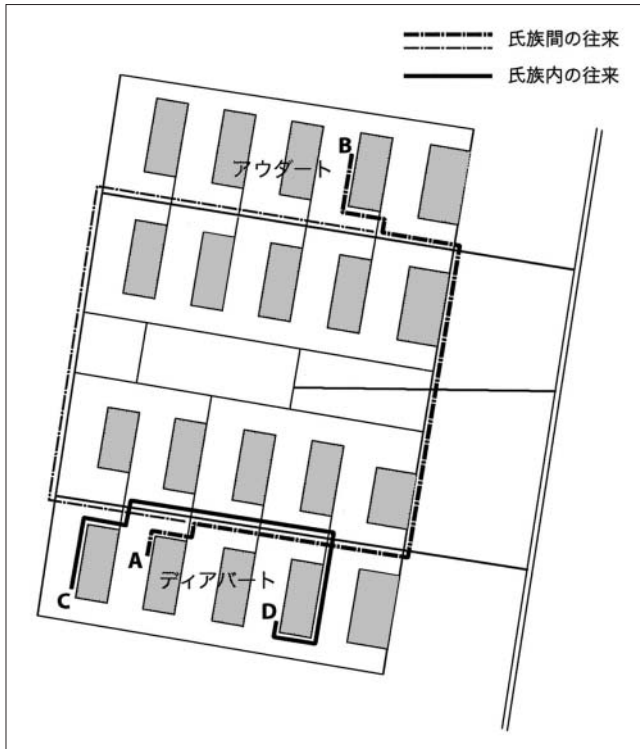


図5 集落内の往来模式図



1



2

図6 ディアバート地区の広場

- 1 全景(南西から)
- 2 ディアバート地区横断道から広場への引き込み道路(南東から)



いないのである（藤井 2001: 137-138）。

フセイニーエ村の事例は、この問題に対して一つのヒントを与えてくれる。この村では、同じフウェイタート部族に属する複数の下位集団（氏族）がまとまって定住化した。この村の南にもフウェイタート部族の村（アル・ハシミール al-Hashimiyya、およびアル・ムハンマディーエ al-Muhammadiyya）があるが、この二つの集落は規模が小さく、単独または少数の氏族による定住化集落である。従って、この地域全体として見ると、フウェイタート部族という大きな部族が氏族を単位に様々な規模で定住を図り、こうしてできたいくつかの集落が一つの文化圏・経済圏を形成していることになる。その中心になっているのが、部族長の出身氏族を含めた多数の氏族によって構成されるフセイニーエ村である。その意味で、同村の定住化経緯は、大型拠点集落の形成過程を探る際の一つのモデルとなり得るであろう。

第二の意義は、上記モデルを遺跡で実際に検証する際の手がかりを得たことである。フセイニーエ村の事例では、集住した各氏族が氏族固有のアイデンティティを堅持し、集落の内外に様々な住み分けの仕組みを設けていることが分かった。同じことは、氏族の下位集団であるファミリーの間でも認められた。すなわち、一つの集落に複数の墓地や水源が伴っていたり、街区に半閉鎖的な往来関係が認められる場合、これを手がかりに、集落内におけるアイデンティティの併存を判読できる可能性がある。集落の街区単位で遺構・遺物の差異が認められる場合、集落内階層性の表れであるとか、分業体制の証しなどと解釈されることが多いが、別の視点から見れば、それは集落構成員の下位アイデンティティの問題でもあり得るわけだ。フセイニーエ村の事例は、そのことを例証している。

第三は、上記2点の補足になるが、実生活というものの持つ融通無碍な性格である。フセイニーエ村の中には複数の氏族アイデンティティが併存しているが、その発現形態は様々であった。例えば墓地の運営に関して氏族のアイデンティティを単独で具現していたのは、ディアパート氏族だけであった。ではこの氏族が部族長の出身母体なのかというと、そうではなかった。部族長を擁するジャーズィ氏族は、集落内第二勢力のアウダート氏族と連合して別の墓地を共同利用し、中小の氏族がこの共同利用に加わっていた。このあたりが難しいところである。しかも、これは墓地だけに限った場合の話である。井戸の分有関係では、墓地とはやや異なる様相が垣間見られた。従って、集落内アイデンティティの件数に応じて、しかもその勢力順に、すべての物事が成り立っているわけではない。むしろ、様々な連携や逆転があり得るわけである。遺跡での検証に際しては、このことに留意しなければならない。

もう一つ、原則の「隙間」という問題もある。フセイニーエ村の道路に、各氏族・各ファミリーの独自性を保証するための半閉鎖的な性格が備わっていることは確かだとしても、実際には空き地を利用した自由な往来が確保されているわけである。逆に言うと、こうした「隙間」の部分があるからこそ、原則が原則として成り立っているとも言える。その意味では、隙間は原則と同等の価値を持つことになる。遺跡では原則の部分のみを明らかにするだけで精一杯であるが、その隙間の部分にまで踏み込んでこそ、原則自体の正当な評価ができるのかも知れない。フセイニーエ村の事例は、そのことも示唆している。

おわりに

ヨルダン南部のフセイニーエ村で、定住化遊牧民の集落内氏族配置と墓地・井戸の分有関係について考えてみた。この村を特徴づけていたのは、構成員の複雑な内訌、出自の違いである。その顕在化が上記の分有関係であり、集落内道路の閉鎖性である。先史時代の集落遺跡で構成員のアイデンティティ問題を扱うのは容易でないが、集落内の街区・道路と集落周辺の墓地・水場との対応関係から、逆に、この問題にアプローチする手は残されているであろう。筆者は今そのことを模索している。

謝辞

本稿は、日本西アジア考古学会第11回大会（2006年6月18日、大正大学）で行った口頭発表に加筆・訂正を加えたものである。その際、有益なコメントをお寄せいただいた参加者の方々に厚くお礼申し上げる。また、調査に協力していただいたフセイニーエ村の方々、一部図版の作成に協力してくれた田中範裕（金沢大学大学院文学研究科、当時）、鈴木香枝（同文学部）の両君にも、お礼申し上げます。なお本稿は、特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス中流域ビシュリ山系の総合研究」（研究代表者：大沼克彦）を構成する計画研究班の一つ「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」（課題番号：17063004、研究代表者：藤井純夫）の研究成果の一部である。

註

- 1) 湧水量と水質に問題が生じたため、北井戸の稼働率は近年下がりがつつある。代わって掘削されたのが、南井戸の西側にある第三の井戸である。しかし、本稿では開村当初の村の形態を重視し、第三の井戸に取って代わられる前の北井戸に力点を置いて記述する。
- 2) ジャーズィ氏族の中でも部族長とその親族は、邸宅内に独自の深井戸を掘って自給体制を完備している。
- 3) 日本西アジア考古学会第11回大会（2006年6月18日、大正大学）で口頭発表した際の配付資料では、アウダート地区の道路が碁盤状になっている。これはヨルダンで購入した地図を基に書き起こしたためであるが、実態とは異なっているとの印象を持っていた。そこで、Google Mapなどの衛星画像を参照して新たに書き起こしたのが、本稿掲載の地図（図1.5）である。

参考文献

- 藤井純夫 2001『ムギとヒツジの考古学』同成社。
- 藤井純夫 2004「西アジア新石器文化の防風壁・防風策」『西アジア考古学』5号 53-78頁。
- 藤井純夫 2005「ヒツジ遊牧の起源と展開：ヨルダン、ジャフル盆地の総合調査(2004年度)」『第12回西アジア発掘調査報告会報告集』26-38頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2006「ワディ・アブ・トレイハ：ヨルダン南部のPPNB遊牧拠点」『第13回西アジア発掘調査報告会報告集』35-47頁、日本西アジア考古学会。
- Jordan National Geographic Center 1984 *National Atlas of Jordan, part I: Hydrology and Agrohydrology*. Amman, Jordan National Geographic Center.
- Jordan National Geographic Center 1986 *National Atlas of Jordan, part II: Climate and Agroclimatology*. Amman, Jordan National Geographic Center.
- Muhammad, G. bin 1999 *The Tribes of Jordan at the Beginning of the Twenty-First Century*. Jordan.

藤井 純夫

金沢大学

Sumio FUJII

Kanazawa University